

## 事業実施報告書

法人名	特定非営利活動法人マナビダネ
活動名	不登校の子どもたちの学びの土台をつくるフリースクール事業
助成事業の種類	SDGs推進活動助成 人間分野
事業の目的	
<p>不登校の子どもたちが安心して過ごし、学びたい気持ちを育める場を提供することを目的としました。学校に通わないことで体験の機会が減り学習の遅れや社会とのつながりの希薄化が進むと、将来的な社会参加のハードルが高まります。本事業では、多様な体験と交流の機会を通じて、子どもたちの学びの基盤を築き、社会的な孤立を防ぐことを目指しました。特に、基礎学力の定着が十分でない低学年の子どもには、学び直しではなく学びの土台をつくる機会が必要です。そのため、自然体験や創作活動、学習支援を組み合わせ、子どもが自発的に学び、自己信頼を育む環境を整えました。また、学習の遅れを取り戻すことで、学校復帰や社会参加への不安を軽減し、選択肢を広げることを目指しました。</p> <p>さらに、親自身も社会とのつながりを持てるよう、保護者の話を聞き、親同士が悩みを共有し支え合える機会を提供しました。子どもと保護者の孤立を防ぎ、地域全体で支える仕組みをつくることで、不登校の親子が安心して学び、成長できる環境の構築を目指しました。</p>	
事業で取り組んだ地域や社会の課題	
<p>埼玉県西部地域では不登校児童が増加している一方で、不登校の子どもが安心して通える居場所や学び場が限られています。特に入間市には、高学年以上を対象とした適応指導教室やオンライン支援はあるものの、低学年の子どもが通える場がほとんどなく、学びの基礎を築くための交流や体験の機会が不足しています。その結果、読み書きや数の概念の習得が遅れ、学習の土台を十分に築けないまま成長してしまうケースが増えています。</p> <p>さらに、学習の遅れが学校復帰を困難にするケースも少なくありません。不登校期間が長引くことで学力面での不安が大きくなり、復帰を希望しても適応が難しくなる子どもが多いのが現状です。</p> <p>本事業では、地域資源を活用し、低学年の子どもも安心して参加できる学びの場を提供するとともに、不登校児童とその家庭が社会とのつながりを維持できる環境づくりに取り組みました。</p>	
取り組んだ事業の具体的な内容・実施結果	
<p>本事業では、不登校児童の学びや社会的つながりを支援するため、フリースクールの運営、支援体制の強化、体験活動と地域連携を実施しました。</p> <p>フリースクールでは、週2回の体験型フリースクールを53回、週1回の学習型フリースクールを24回開催し、延べ373名が参加しました。助成により月曜の学習支援を継続でき、費用負担なく支援を続けられました。また、学習に苦手意識のある子どもや発達特性による困難を抱える子どもと関わることで、スタッフが特性を理解し、団体の強みを活かした支援方法を見出しました。公認心理師の訪問支援を月1回、計6回実施。4名以上のスタッフを配置し、心理師の定期訪問で子どもの課題を把握し、支援方法を共有しました。また、入間市で課題視されていた保護者を早稲田大学心理相談へつなぐ支援を実施しました。</p> <p>体験活動では、調理や遊びに科学・算数の要素を取り入れ、早稲田大学訪問や染織工房での体験、入間市博物館学芸員協力による窒素実験、福島食品の協力による調理実習を行いました。さらに、奥武蔵ピースラボと川遊びを実施し、地域との連携を強化しました。</p>	
事業実施により達成した成果の具体的な内容	
<p>本事業により、学びの継続や社会的つながりが確保され、子どもや保護者に具体的な変化が生じました。子どもたちは協働で遊ぶ力が身につき、語彙や相手を気遣う言葉が増加しました。また、学びへの意欲が高まり、教科学習に取り組む姿も見られました。緊張が強く、人と関わる機会が少なかった高学年の子どもが、互いを意識し合い、友達との関わりを求めるようになりました。さらに、昼夜逆転が改善した子どもがいたほか、安心できる場ができたことで、多くの子どもの笑顔が増えました。保護者は、指定した活動参加日に交流し、スタッフや他の保護者とのつながりを深めました。その結果、わが子だけでなく、不登校の子どもたちへの理解も向上しました。また、訪問心理師と数名の保護者がつながり、継続支援の依頼ができました。地域とのつながりも広がり、9月と12月に各1名の無償ボランティアが加わり、支援体制が強化されました。学生ボランティアの申し込みも2件あり、今後の活動の発展が期待されます。</p> <p>これらの取り組みにより、地域の協力団体との関係が深まり、持続可能な支援体制の強化につながりました。</p>	

### 費用面での工夫

本事業では、限られた予算の中で効果的な活動を実施するため、助成金の大部分を人件費に充て、継続的な支援体制を確保しました。人件費の割合は83%とし、スタッフの役割分担を工夫して支援の質を維持しました。また、通信運搬費や印刷費を削減し、より多くの資金を直接的な支援に活用しました。

今年から有料化した月曜事業は、収益が安定するまで運営の見通しが立ちにくい状況でした。そのため、活動を知つてもらう機会として無料体験者を受け入れ、数名の子どもと関わる中で試行錯誤を重ねました。これにより、効果的な学習支援方法を模索し、今後の支援拡充に向けた基盤を築きました。

また、当方に通う子どもは1年前後で学校復帰するケースが多く、運営の安定が課題でした。そこで、持続可能な運営基盤を整えるために助成金を活用し、運営の実態を把握。本事業で得た知見をもとに今後の予算立ての参考とし、収支バランスを考慮した運営方針を検討していきます。

加えて、地域の協力を得て教材や食材の寄付を受けたことで、体験活動日での出費を抑えながら充実した内容が提供できました。

### 地域社会への還元

本事業を通じて、不登校の子どもたちと地域の人々がつながる機会が増え、地域全体で子どもたちを支える意識が醸成されました。埼玉西部地域の企業や地域で活動する支援者との関わりを通じ、普段は不登校児童と接点のない人々にも現状や子どもたちのニーズへの理解が広がりました。

また、早稲田大学のゼミ生との交流や体験活動を通じて、大学関係者が地域の子どもたちと関わる機会が生まれ、ゼミ学生にとっても学びの場となりました。こうした取り組みにより、子どもたちの学習支援に関する知見が地域全体で深まつたほか、不登校の子どもたちが自分らしく社会と関わる機会を持つことが、地域の活力につながるという理解が深まりました。

さらに、子どもたちを支援したいと考える人が増え、応援したいと声を上げる人が増加しました。支援の輪が広がり、ボランティアの場を提供する機会も増えています。今後も、地域の協力者を増やし、子どもたちの学びの機会を広げる取り組みを継続していきます。

### 今後どのように事業を継続し発展させるか

昨年度は週2回の活動で助成を受け、今年度は月曜を加えた週3回の事業として助成を受けました。法人設立3年目となり、有料フリースクールの運営も2年半が経過。この間の経験を通じ、不登校の子どもたちが安心して学びに向かうための支援が重要であることを再確認し、学びの土台を築く方法が明確になりました。その結果、受益者負担を増やしながら持続可能な運営を目指す必要性を認識しました。今後は、利用者の負担を少し上げつつ、地元の理解を得ながら寄付収入を拡大し、安定した活動を実現していきます。のために広報を強化し、フリースクールの認知を広げ、共感し支援してくれる「ファン」を増やすことを次年度の重点目標とします。また、収益向上のため、学び直し支援や個別指導の強化を図り、学習支援の質を向上させることで、学びに向かう意欲を引き出します。さらに、拠点を持つことで学びの場を広げ、人のつながりを生み、地域との関係強化にもつなげていきます。運営基盤を強化し、地域と連携しながら事業を発展させていきます。

## 事業収支計算書

法人名 特定非営利活動法人マナビダネ

### 1 収入の部

(単位:円)

項目	予算額 A	決算額 B	増減額 C=B-A	備考
助成金	500,000	500,000	0	
自己資金	95,340	22,222	△ 73,118	
活動実施による収入等	1,116,000	1,060,400	△ 55,600	
その他	0	1,660	1,660	
収入の部 合計	1,711,340	1,584,282	△ 127,058	

### 2 支出の部

(単位:円)

項目	予算額 A	決算額 B	増減額 C=B-A	備考
会場費	12,000	900	②	
通信運搬費	0	0	0	
旅費交通費	96,340	63,180	△ 33,160	
消耗品費	53,000	48,564	△ 4,436	
備品費	0	0	0	
委託費	0	0	0	
謝金	120,000	120,000	0	
人件費	1,397,000	1,313,000	△ 84,000	
その他	33,000	38,638	5,638	
支出の部 合計	1,711,340	1,584,282	△ 115,958	